とまりによる重層的なネットワークはその後も維持されたことを本書は明らかにした。中国文化の伝統的な「越境性」は変わることはなかったのである。ある社会集団における西洋文明と伝統文化の共存の在り方を示すものとして、本書が提示するモデルは非常に興味深い。是非ご一読をお薦めしたいと思う。

（A5版　三六八頁　二〇一五年一月
風響社　税別四〇〇〇円）

（小堀慎悟　京都大学大学院修士課程）

波田野節子著
『李光洙――韓国近代文学の祖と「親日」の烙印』

本書は、李光洙（イ・グァンス）（一八九二～一九五〇?）の生涯をたどった評伝である。本書の副題にあるとおり、李光洙は「韓国近代文学の祖」であると同時に、「親日」作家として、その名前が記憶されてきた。一九一九年の三・一独立運動の先駆けとなった二・八独立宣言を起草し、上海に亡命、大韓民国臨時政府に身を投じ機関紙『独立新聞』の主筆をつとめるなど民族運動家としての名声もある。著者が述べるように、仮にそのまま上海で客死していたら、輝かしい「民族の英雄」としてその名が記憶されたであろう人物だ。

しかし、上海から朝鮮へ戻り一九二二年に発表した「民族改造論」で朝鮮民族の「道徳的悪習」と「改造」の必要性を説いて物議を醸した。それでも日中戦争下に治安維持法違反で逮捕された際に仮に獄死していれば「民族の英雄」として記憶されたかもしれない。しかし逮捕後に親日的な言動を積極的に行うようになり、解放後には「民族反逆者」として激しく非難された。一九四九年に反民族行為処罰法により逮捕収監され（最終的には不起訴）、朝鮮戦争中の一九五〇年七月に朝鮮人民軍に捉えられ、平壌に移送され同年病死したとされる。

著者の波田野節子氏は、一九八〇年代から長年にわたり李光洙研究に取り組んできた朝鮮文学研究者である。李光洙の代表作の長編小説『無情』を翻訳（平凡社、二〇〇五年）したほか、『李光洙・『無情』の研究――韓国啓蒙文学の光と影』（白帝社、二〇〇八年）、『韓国近代文学研究――李光洙・洪命憙・金東仁』『韓国近代作家たちの日本留学』（二冊とも白帝社、二〇一三年）など本書の基盤となる研究書を通じて、主に李光洙の「近代文学の祖」としての側面を追究してきた著者が、李光洙の「人生の後半」、すなわち「親日」の側面も含めて新書として書き下ろしたのが本書である。李光洙について一般向けに日本語で書かれた評伝は本書が初めてである。前述のように評価をめぐって議論が多い人物であるが、本書は性急な評価は避け、文学研究者らしい丁寧なテクスト解釈とともに、李光洙が生きた時代と空間、その葛藤を追体験するかのように読み進むことができる優れた評伝である。

評者は以前、李光洙を紹介するコラムで「日本で言えば夏目漱石のように紙幣になってもおかしくないほどの位置にある作家でありながら、『民族反逆者』『民族の汚点』として糾弾される李光洙のような人物をうんでしまった、日本による朝鮮植民地支配とは何だったのか。日本（人）こそがこの問いを問い続ける必要があるだろう。」と書いた（『東アジア近現代通史』六、岩

波書店、二〇一一年）。日本の近代に翻弄された植民地の作家李光洙を「窓」として日本を見つめることを目的と位置づける本書は、その問いを問い続けるためにこそ、多くの人に読まれて欲しい一冊だ。

（新書判　二四八頁　二〇一五年六月
中央公論新社　税別八二〇円）

（河かおる　滋賀県立大学准教授）

『史林』投稿規定

◇資格　本会会員であること。
◇投稿受付原稿の種類、長さ
論説　1段組54字×19行の体裁で、三二〇〇字以内
研究ノート　2段組29字×20行の体裁で、二〇〇〇字以内
研究動向　2段組29字×20行の体裁で、三二〇〇字以内
史料紹介　2段組29字×20行の体裁で、三二〇〇字以内
書評・論文評　2段組、八〇〇字以内
紹介　3段組、一二〇〇字程度
◇原稿の種類を明示すること。
◇いずれにおいても、本文や注だけでなく謝辞や図表・翻刻を含めて、それぞれの紙幅に収めること。
◇注は各章末に入れること。
◇「欧文タイトル」を添付すること。
◇論説には「要約」（四〇〇字以内）を添付のこと。「要約」は上記の紙幅制限の対象外とする。
◇論説および研究ノートの投稿者は、掲載が決定した時点で、「欧文要約」（六〇〇～八〇〇語程度）を提出すること。なお、英文要約に限り、翻訳による作成依頼にも応じるが、経費は投稿者負担とする。
◇投稿に際しては、（1）プリントアウト一部もしくはPDFファイル、および（2）電子データを送付する。電子データに関する詳細は下記「補足」の〈電子データ作成要領〉を参照。電子データを準備できない場合は、あらかじめ事務局まで連絡すること。
◇図版を用いる場合は、下記「補足」の〈図版作成要領〉に従って作成、添付すること。
注意：編集委員会において、印刷技術上、図版の修正や特殊活字の作成を要すると判断し、これを業者に委託した場合には、その経費の一部、数千円～数万円を負担していただきます。あらかじめご了解下さい。

送り先：史林編集委員会
〒六〇六-八五〇一　京都市左京区吉田本町
京都大学大学院文学研究科内　史学研究会

『史林』投稿規定「補足」

〈電子データ添付要領〉
・電子データは、フロッピーディスク、CD-R、CD-RW、USBフラッシュメモリなどのメディアに保存して郵送することを原則とする。郵送に不便があるなどの事由で、メールによる投稿を希望する場合は、あらかじめ事務局に問い合わせること。
・本文の電子データは、マイクロソフト・ワード、一太郎、テキストファイルのいずれかの形式で保存し、保存形式（OSおよび使用ソフト）を明示すること。
・図版に電子データを使用する場合には、300dpi以上の解像度とする。ソフト（IllustratorやPhotoshopなど）やバージョンについて事前に照会・確認をすること。